鯰絵翻刻　Ⅰ期

凡例

■本翻刻文は、宮田登・高田衛監修　一九九五年『鯰絵―震災と日本文化』「第五部　鯰絵総目録」に掲載されている翻刻文を参考に作成しました。

■虫損、破損等のために原文が判読不能な場合は、前書の翻刻文を元に記載し、文字の色を灰色にしています。

■一行内の文字数は原文と異なる場合がありますが原文の行替に従って改行しています。

■翻刻文の読みやすさのため、文の区切りとなる部分に適宜スペースを挿入しています。

■漢字については、適宜旧漢字から常用漢字へ直しています。

■旧かなづかい、カタカナ交じり文、送り仮名については原文表記のままとしています。

■旧かなづかい等により、特に意味がとりにくいと思われる単語、また、鯰絵独特の言い回しで言葉が掛けられているものは、（＝）のかたちで適宜補足しています。

■その他、語句説明等を【※　】のかたちで適宜補足しています。

■本翻刻文では、資料の時代性を考慮し、現代では差別用語、不適切な表現とされる語句をそのまま記載していますが、差別を容認、助長するものではありません。

No.107「地震用心の歌」

地震用心の歌　ものの名

魚の名十

さは(鯖)　かしき(カジキ)　なます(鯰)　ふり(鰤)　ふりう　こひ(鯉)　たら(鱈)

はや(鮠)　くいなせ(鰡)　よ　ふか(養鯨(＝サメ))　きさ　さはら(鰆)

鳥の名十

何(なん)　とき(鴇)　きも　きし(雉子)　鷲(＝ガチョウ)　か　なく　日は(鶸(カ))　う(鵜)　かり(雁)　すな

藪(やぶ)へかけ(鶏)　とひ(鳶)　さき(鷺)　へ　すすめ(雀)　よ

虫の名十

あふ(虻)　な　くも(蛛)　け　か(蛾)　あり(蟻)　し　てふ(蝶)　きて　だに(蠕)

身に(蚤)　のみ　しみ(紙虫)　て　いとど(竈虫)　か(蚊)　なしき

草の名十

ゆり(百合)　やんでつい(藺)　には　よし(葭)　と　きく(菊)　とて　も(藻)

つた(蔦)　な(菜)　きとこに　しば(芝)　し　ねむ(合歓)　らん(蘭)

木の名十

つき(槻)　ひ　すき(桧杉)　やむ　かや(榧)　と気(き)を

もみ(樅)　きり(桐)　ぬ　まつ(松)　もも(桃)　ど　かし(樫)

地震(ぢしん)　なき(梛)　日を

No.108「鹿島大神宮託日」

鹿島大神宮託日（かしまだいじんぐうおふせわたし）

「其方共義諸神并に
それがしの留守の間を見こみ
なまづなかまにてらんぼういたし
江戸をはじめ近国までひびき
わたり　古今まれなるさハぎと成
家くらをゆりつぶし
なを又出火して　武家
町家のさべつなく　あまた
やきうしなふうへ　けが人又
一命にかかハるもの多きよし
此つミ何を以くらふへきぞ
これミな諸神をあなとりわれを
かろしめることふらちしこく也　今より
ハ大りう王へ申つかハし　のこりなく
なまづ共を八ツざきにいたし　此
たひのつミをただし　のちのいましめに
いたさんとにがり切ておおせけるに　なまつハ
ふかくおそれ御こたへをいたすやう
「おふせのおもむきおそれ入奉り候也　それにつき
いいわけと申スでハござりませんが　今年ハあついさむいの
しかう（＝時候）大きにちがひ　其きのちがふにより　十月以のほか
あたたか也　わたくしどもハちいさくなつてかたまつているしふん（＝時分）
なれど　右のあたたかさにてはやはるにも成たるかとやうき

にのぼせ　わきまへなきものともらんしんのことくさハぎくるひ
そのひびき日本にあたり　いへくらその外をそんじ候もまつたく
きちかひよりおこる所に候也　もとよりぬらくらもののことにて
いかにせいとういたしてもきき入なく　さハぎ立るものとも　ただ
今のおもむき申きかせ候ハハ　つつしミまするやう云付候べし」と
いふに　かしま大神又曰く「此たひのそうどうにて
そんじたるもの左のことし

▲御大名方土蔵　壱万三千二百余
▲御はた本方同　三万六千五百余
▲御家人方　壱万八千五百余
▲寺社并土蔵共　五万二千五百余
▲町方土蔵　十万五千二百余
▲焼失町家武家方たてよこを分て
壱丁ツツさす　但し六十間壱丁に立る
四百七十壱丁　○崩れたる分ハ不知
△死人　十月廿日迄しれたるは　十一万八千五首十六人
但し廿一日よりの分　又けが人とうハ後に改出ス

右の通りのそんじ也　なんぢうきうはくしたり共
あきたるにあらす　へんとうにより取はからふ
次第ありと仰に　なまつハかしこまり奉り
地の下へかへり　なかまいつとうそうたん（＝相談）
の上　せうもん（＝誓文）さし上る　其文ニ云　【※以下、鯰の誓文】
一　当十月二日御支配（こしはい）の内
江戸其外近国まで大ゆすり
いたし　家くらをひつくり

かへし　長屋をゆりつぶし　火の見
ものほしとうをちうかへりいたさセ　其上
出火と相成　御類焼多く　御迷惑の
御方様あまたのよし　重々奉恐入候
たとひ此以後寒暖の気ちがい候とも
ぬらくらもののふざけ等ハけつして
仕らず　千万年天下太平にて
身ぶるひ程もうごきなき御国と
しゆご（＝守護）仕候間　何卒御じひに
ハツざきの上　付あぶりの義御
ゆるし被下（＝くだされ）候やう奉願上候と有　【※ここまで誓文】
是にて御聞済有て　万歳太平
成候国と成しるし有て　めてたし　めてたし

No.109「鯰と要石」

かしま
「これハたいへん　るすニ
とんだ事だ　はやくいつて
かたをつけすハなるまい

雷
「いやも　おれなぞハ
いくらおもつても人が
へのよふにおもつてとり
あげてくれねへにハこまる

No.110「神馬（八幡宮・大神宮・鹿島大明神）」

八幡宮
我等も
遠方
注進
に付　今帰り
これハ
大へん　大へん

太神宮
江戸にてなまづ
どもうちより
さハき候よし　鹿嶋
明神通りかけ
ちうしん
いたすゆへ
そふそふ欠付（＝駆けつけ）
諸人をたすけの
手当なきまま
馬の毛を一本つつあたへ候　しづかに立のけ　立のけ

鹿嶋大明神
是ハ大へん大へん　外の国とちかひ　当所にて
なまづともかやうのそふどふいたす事
我等留主中を
あなどり候だん
不届至極

一人もそのままに致かたし　諸人
もはや我帰る上は
あんど致　けがせぬ
やう　しづまれ　しづまれ

No.一一一「鯰をおさえる鹿島大明神」

かこいもの
我ハ旦那さまがつぶされまして
このせつハあいてかござりませんが
どうか横丁の大工さんか目をかけて
下さいますから　とうかあの人を旦なに
いたしとう
ございます

屋ねや
わたくし共ハあなたおかけを
持まして金もうけかできますから　このうへ
百万両の大じんになされて下さいますよう
御ねがひ申上まする

左官
さてわたくしはあなたの御かげで土蔵・かべともに仕ごとか
ござりしよして　このような事わござりません由へ来年ハ
御本社へも参けいいたしますが　なまづさまへもよろしく
おねがひ申ます　又土蔵一ツとどうかとそんしますが
これもよろしく
ねがひ上ます

金持
さて我ハこのたび大そうどうてし事ニ
こまります

しかしこの上
何事もないように御ねがひ
申上ます

金持
さて我ハこのたび大そうどうてし事ニ
こまります
しかしこの上
何事もないように御ねがひ
申上ます

子供
わたしやおかさんか死ましてから
とうそ御とつさんかかわゐかつて
四文ハ又くれるように
御願申
まする

かわらや
とふど御上共に
ミんなかわらやねに致す
ように御ねかひ
申ます

とびのもの
このはるよりもせわしう

ござりますが　このせつハ別たん
の事ゆへ金ハたんとくれますから
御上も御ねかひ申
あけます

大工
わたくしハ　仕事も沢さんござりますか
真事に材木か高イゆへこまります
とうか御りやくを持まして
大仕事を御さづけ下さりますように
御ねがひ申あげ
ます

安女郎
我ハあなたかけて命ハたすかりました
とうぞいい密の男のいえ倉のたんと有
御さすけな
さります

No.113「地震火災あくはらひ」

地震火災あくはらひ

アアラ　でツかいな　でツかいな　今はん今宵の天災を　神の力て
はらひませう　十月二日三か日　町並お門を　詠れハ
三国一夜のそのうちに　土蔵や壁の不事の山
かかるうきめに相生の　松丸太やら杉丸太　錺（＝飾）り立たる
諸道具を　お庭外（＝鬼は外）へ持はこひ　野宿する身の苦は
病ひ　五七か雨とふりかかる　瓦や石の目にしミて
なミたにしめす焼原の　昼夜ねつはん自身番※　火の
用心や身の用心　春ならねとも皆人の　万才楽とうたひそめ
かそへたはしらもおれ口の　おめてたくなる人の山　これも世直し出雲
から立かへりたる神々の　ふミかためたる芦原皇国　千代に八千代に　要石の
磐となりて苔のむす　ゆるかぬ御代をははからす　又もやひまをかきつけて
ぬらくら物の　鯰めか　わるく尾鰭を動かさハ　鹿島の神の名代に
此こと触（＝事触）かおさへつけ　高麻か原をうち越て　みもすそ川へさらり
さらり

【※自身番＝江戸時代、町人たちが運営した町内警備のための番所】

No.114「おそろ感心要石」

かしま「サテ サテ
こまつたぬら
くらものだ
こういふことも
あらふかと
かなめいしで
おさへつけて
五七があめの
おきてどふりハ
かつてな身
うごきハさせ
なんだに
このはうはじめ
れんぢうのかミかミが
いづもへたびだち
いたしたあとで どこを
どふにげおつたか 地の下から
むぐりだしてかく人げんかいを
ゆすりちらし らんぼうの
はたらきふらちせんばん こんどハけつして
ゆるさぬぞ サアサアまつしやのかミがミたちふかく
ほつていけたかへ おもしをしつかりするさつしやれ
そしてこんどハいしのそばへぢしんばんをたてずハ
なるまい ぼんぶたちがねがひのとほり おれが
かへつたうへからは みぶるひどころかびんぼう
ゆるぎもさせぬから のじゆくをせずと

あんしんしてうちへねろ　ハテサ　おちる
はり（＝梁）あれバ　たすけるかミありダ【※捨てる神あれば拾う神あり】

はなしか「ヱヱありがてへ　かしまさまのおかげゆゑ
あばれものをおしづめなされて　よふよふきん玉がさがりました
しかし　わたくしどものとせいハとうぶんあがつたりでなんじういたしやす
から　さひわひなまづをうめ
つちかつぎにでもおつかひなされてくださりませうなら　へイ　へイ　へイ
土方（どかた）じけのふ（＝かたじけのう）ござりやす

たいこもち「トキにわつちもこの男どうやうに　なんじうようかんかのこも
ち　こまりいりやのきしぼじん
つちをかついで二百になるふだんひやつぴのおじぎより　ありがたいト申や
す　イヤハヤまいど
なまづのおりやうりかげんハ　あなたにかぎかぎめうでごぜへす　おそろかん
しんかなめ（＝肝心要）石サ

おいらん「モシヱ　わちきやアまア　二日のばんのやうになまづさんがおい
でなんしてあばれなんすと
しやうもやうもおざりイせんヨ　とこへいれ申てなだめまうしんしやうと
おもいんしたが　そのうちに
いちざの嘉二郎さんがおとりなんして　やけになつてあバれなんすし　こりや
アとても地ごくと
やらへくらがへをすることだろうとあきれたが　にげるだけハにげやうと　か
つてからはねばしを
おろしてわたらうとしたら　あんまりあハをたべんしたもんだからおはぐろ
どぶへ

おつこちになりいして　やうやうあがつてなじミのとこへゆくみちみち
人にゆきあふと　あの女郎ハどろミづがしミてゐるとわるくちを
いわれんしたがほんにすゐなかしまさんのおかげゆゑ　なまづつらをおしづ
め
なされておうれしうざます　このすへあんなことのないやうに
おたのミ申んす　ごしやう（＝後生）でざんす　おがミんすヨ

ばば「ヤレヤレわしらア　くにさアにゐるときやア　たけのはしらにかやのや
ねでなんぼ
なまづどのがほてつぱらアたちめさつてもあんともおもひヤさなんだが　五
十ねん
あとにいまのぢぢイどんとむぎばたけのちちくりあひがえんとなつて　ごと
う地へ
おつぽしつしてきたもんだアから　こんどのやうなきもだまアでんぐりかへ
すやうなめに
あひ申す　そんだアけれど　かしまさまのおかげでこんどもからだアふろい
ましたアから
よくよくいのちめうがのあるのだアまたとつひやくねんもいきのびるのだか
ムシにやむあミだ　あミだ　あミだ

むすめ「わたいハこのあいだからかなめいしさまへごがんをかけるとふり
はやくしばゐや
よせのできるやうにおねがひでござりますきのふよそのおばさんがいふにハ
おまへもやがてよめ入をするとぢしんをゆらせるのだといひなすつたが　ま
つひらでございますヨ

さむらい「せつしやことは　スハせんじやうと

いふときハ百万の大てきをもものの
かずともいたさぬが　イヤハヤこんどの
ぢしんにハはいぐんいたした
兵書（へいしょ）にあるとほり地にいて
なん（＝難）をわすれずゆだん
大てきとハこの事でござる　しかし
かしまどののごかせいでなまづ
がたハとうとういけとりとあいなり
けんぞくの小なまづハかばやきやの
手にわたり　だい道（とう）ざきのうきめに
あふとハ小きミのよいことでござる
四かい太平ゆるがぬみよ
まんざいらくの千しうらく
地しんのうちどめ　ゆりどめ　ゆりどめ

あき人　これでやうやうそんもうの
うめくさをいたしました　いわふて
ひとつしめませう　そうしめじや　そうしめじや

ミなミな　「シヤ　シヤ　シヤ　シャン　シャン　シャン
シャン　シャン　シャン　シャン　シャン　シャン

No.115「地震鯰の取り調べ」

かしまさま
「くにぐにの地しんどものみせしめに
まづ江戸のぢしんめを
てひどくうち
のめし しよにん(=諸人)の
あだをてきめんに
とるがよか
ろう

神
「ハイハイ かしこまり
ました このあたまに
さしたるかなめ石を
さんざんにうちこミ
そのうへでせびらきに
して なまづの大かバやきを
こしらへ しよにんへ
ほどこしませう

江戸
「アア いたやいたや
このうへの
おねがいにハ
いのちはかりを
おたすけくだされ
そのかハりにハ

いまよりして
なまづのけんくわや
じやりの
うへへでますことハ
いたしません」

くわんハしう（＝関八州）
「わたくしハ
どのくににも
あしをとめませぬ
くわんとうすぢをのたくり
あるきましたが
これからハきつと
つつしミます

しんしう（＝信州）
「わたくしのつミをゆるして
くださるならバ　信しうな
かまども（＝仲間ども）　なつちも
いらねへ

小田はら（＝小田原）
「どうぞとが（＝咎）のせんぎ（＝詮議）
をだ（＝穏）はかになれバいいが

ゑちご（＝越後）
「わたくしハ　ゑつちりゑちごの

ぢしんゆへ　かくべゑのやうに
さかさになつて　おわびを
まうします

甲しう（＝甲州）
「わたくしハかうしうの
うまれゆへ
ぶどうのやうな
ひやあせを
ながしておそれ
いります

大さか（＝大坂）
「大坂をゆり
いだして　ならの
はたごや
ミわのちや店
まですこしハ
いたませましたること
いつわり
なく
まうしあげ
ます

信州のぢしん
小田原のぢしん
え ちごのぢしん
甲しうの地しん
大坂のぢしん
く わんとう（＝関東）のぢしん

恵比寿天申訳之記

我等諸神に留守居をあづかり罷居候ところ
あまりよきたいをつりしゆへ　一盃をすごし
たいすい（＝大酔）ニおよび候あいだをつけこミ　たちまち
かなめいしをはねかへし　大江戸へまかりいで
蔵のこしまきをうちくづし　はちまきを
はがし　諸家をつぶし　死亡人すくなからず
出火いたさせ　はなはだぼうじやくふじんの
しょぎやういたし候ゆへ　さつそくとりおさへ
ぎんミ仕候ところ　一とうのなまづハ身ぶるひして
大ニおそれ　一言のこたへもなく　このときかしらだち
たるとミゆるものつつしんで申たまふ
「おそれながら仰のおもむきかしこまり候也　此たび大へんの
ことハ一とふり御きき遊され下さるべし　此義ハ申上ずとも御存の
義にして　はるなつあきふゆのうちに　あついじふんにさむい日あり
さむいときにあたたかなる日あり　かくのごとくきこうのくるひ
有て　かんだんの順なるとしハ少く候　今年最ふじゆん（＝不順）なから
ごこくのよくミのり候ハ　八百万神の御守り遊され候
御力による所也　さて天地にかんだんの順のさだまり
ありて　はるなつと其きのじかう（＝時候）ことの外くるひ候ゆへ
わたくしともくにのすまひにてハ　以の外おもしろき
じせつになりたりと　わきまへなきものども　ちん
しんのごとくくるひまハり候ゆへ　わたくしども
いろいろせいとう（＝制動）をいたさせども　みみにもかけず

らんぼうにくるひさハぎ候より　つひに思ひよら
ざる日本へひびき　御しはいの内なる
ところをそんじ
候だん　いかなる
つミにおこなわるともいはい（＝違背）
これなく候也　され共わけて
御ねがひにハ　わたくしども
のこりなく御かりつくし候とも
そんじたるいへ　くらのたつにもあらねバ
まつしばらくのいのちを御あづけ
下され　これより日本のとちをまもり
いかなるじかうちがひにてもこの
たびのごときことハもうとう仕らず
天下たいへい　ごこくほうねんを
君が代をまもり奉り候べし」と
一とうにねがひけるゆへ　わたくし
より御わび申上候ところ　さつそく
御ききすミ下されまことに
もつてありがたく候
きやうこう（＝向後）十月のため
よつて苦難（くなん）のことし（＝件（くだん）の如（ごと）し）
自身除之守（じしんよけのまもり）
【梵字】（東方）【梵字】（西方）【梵字】（南方）【梵字】（北方）
各四方へはるべし
【梵字】　家の中なるてん上にはる又守に入置
てもよし

No.117「地震のまもり」

天照大神を初メとして
鹿島大明神又ハ
地の神井戸神にて
地しんをいましめ
たもふの図をし
るし地震除の守りまで書のせ
置候何卒高評を願ふのミ

地震のまもり
天照太神曰
其外共義前々（まへ〳〵）より聞（きか）せおく通り此婆婆世界の
うち日本国中の地の上ハそれがしを初（はじ）メとして諸神（しょじん）の
守護にして地の下ハ金輪（こんりん）ならくゑんま王の住所まで
堅牢地神と鹿島明神のあづかる所しかるに例年の
ことにして朔日より出雲の大社へ参りいる留守中を見こミ其
方ども平常の戒をわすれ乱行いたし御府内近国に至迄ゆり潰し
家くら石垣其外を崩し其上出火となり数ケ所の焼失のミならずけが人尚又
いち命に及もの甚多きよし是骨其方どもかねてのいましめをやぶりたる大ざ
い也

鹿島太神曰
「いかに其方とも今天照宮様の仰の通り集るそのうちとてもかくの事き
異変ありてハそれがしの守護（しゅご）役のかど立がたく某（それがし）をないがしろにするふら
ち
もの壱ぴきも其ままさし置がたしへんとう有やとふかくいかりをあらハし仰（おおせ）

けるに一どうのなまづハ身ぶるひして大におそれ一言の申ひらきなきこのと
き西の
方のなまづ慎んで申ス「おそれながら仰のおもむきかしこまり候此度大へん
のことハ一ト通
御聞遊され下さるべし　此義ハ申上ずとも御存の義にて　はるなつあきふゆの
うちにあつき
時分に寒き日あり　寒きときに暑き日あり　かくのごとく気候のくるひ有て
かんだんの順なる年ハ
少く候　今年最ふじゆん（＝不順）なから五穀よくミのり候ハ　八百万神の
御守り遊され候御力による所なり　扨
かんだんの順のさだまりありて　春夏のじかう（＝時候）ことの外くるひ候ゆ
へ　私ども地下のすまひにてハ以の
外のじせつになりけるとわきまへ　皆々どもらんしんのごとくくるひまハり候
ゆへ　わたくしいろいろせい
とういたせども　みみにもかけずらんぼうにくるいさハぎ候ゆへ　つひに思ひよ
らざる日本へひびき　御支配
内なる家くらをそんじ候段　いかなるつミにおこなハるともいはい（＝違背）こ
れなく候　されどもわけて御願にハ
わたくしどものこらず御かりつくし候共　そんじたるいへ・くらのたつにもあ
らねバ　まづしばらくの命を
御預ケ下され　是より日本のとちをまもり　いかなるじかうちがひにても此度
のごとき事ハもうとう
仕らす　天下たいへい・ほうねんと君か世を守り奉り候べしと一とう願けるゆ
へ　御ゆるし有ていづれもかへされけり
△それ地しんハ二十里四方もゆるものにて　そのいへ
ばかりのがるるといふ事なし　されど鹿しま明神

の御宮居をはじめ　其御領分内にすむ家のあまた
あれど　むかしより地しんにてわざわひある
ことをきかず　今左にしるす
【梵字(東方)】【梵字(西方)】【梵字(南方)】【梵字(北方)】はる也
【梵字】家の中なるてん上へはる　又守りにて身につける也

右の守ハたとへぢしん有ても此家
ばかりハさハりなし　万化宝といふ本を
見るべし　此ことを信じて用ひたる
家ハ何ごともなし　されば
是も世の心得にならん
と　ここにしるすなり

No.一一8「ほね抜どぞう・おなんぎ家場焼」

ほね抜どぞう
なまづおなんぎ大家場焼

かしま
「それあちら
でもはやくと
おつしやるぞ　なに
をうろうろして
いるのだ　はやく
しないか　いま
せいだして
しよくにん
しうのくい
ものにして
やりやれさ

女郎
「アアいまあげへすよ
じれつたい　そんなに
せかずとすこしまち
なよ　まちなよ　いまにうちが
きまるとゆつくりして
あげへすからさ　はい
おちようし（＝お銚子）のおかわり
これで三ツめだよ
じれつてへ

せとう
「いやもこんどのぢしんハ
たいへんだから　おめへ
たちハさぞこまるだ
ろうのふ　しかしおれ
たちもあのときにハ
どうしようと
おもつたが
この
あん
ばい
では
すこ
しハ
おち
ついた
ようだが
しかし
まだまだ
わからねへ

芸人
「いやおまへさん
がたハこのたい
へんでもそう
たいそうにを
しよつてあるき

なさつても　バんバん
うれるからあんしん
だか　わたしらなぞの
ミぶんでハこれからハ
まことにこまりきります
しかし　もうそろそろとなりどなりが
おだやかになつてきたから　らい
はるハよなをしでござりましやう

人足
「アアうめへさけだ　してこのおおなまづの
かばやきハまたかくべつにうめへわへ　このあら
をしつてハこてへられねへ　しかしこんな
ことハそうたびたびハねへと　かしまのおやぶん
いつたから　いまのうちおもいれくつてやろふ

やねや
「これハきミやう（＝奇妙）　大あたり　大あたり
このこと　このこと　これにかぎります
どれおれもはいつていつはい
やらかそう　これをミてハ
たまらなくなつてきた

ゑし
「へへへへへ　ありがとうござり
ます　なにぶんおねがい
申ます　なんでも

かくことがすく
なくつてハ
いけません

地主
「ヘイヘイ いま
じきにやけます
なんでもはや こんな
ことハやめてもらいたい まこと
にしかけないから こしがいたく
なつてきた

板元
「どうだきさまたちもこん
どのいつけんですこしハ
かくこともあろう これも
あまりながく
つづいてハあとが
わりいから は
やくよなをし よなをし

くら持
「ヘイ おまへさんかね
おあつらへができました
いやもこんどのぢしん
にハおおきなめに
あいました はやく

おあがりなさり
まし

しやかん（＝左官）
「いやアこれハ
ありがてへ
このこと　このこと
どれ
はやく
して△
△やりてへ
すぐにか
わりを
たのミます

大工
「ヲイヲイ　おねさん
もうひとさら
はやくやいてくんな
このあじをしめ
てハこてへられねへ
そしてさけもよ
はやくしてくんな

No.119「要石を倒す人々」

みなみな
「このように大地しんがゆりますハ これも
天さいとあきらめてわおりますけれど
あきらめられぬハ われわれしようばい
間事（＝まこと）間事ひまになりてこまります
とうかあなたさまの
おひよりで わたくし
どものせわしく
なりますようニ
おねがい申ます
なむ天道さま
と ミなミな
一どうニ
ねがひける

天道「これこれミなミなそのようニ
地しんをあんじるな
たとへとうじひまで
あろうともくよくよ
するなよ これを
ミよ このようにくわを
てニもち さかんの
てつだいニさいでれば
しことハつづくし かねニハ
なるし くよくよせづに

はやこれをもち
世わたりなせよと
しめし給ふ

ミなミな
「申　かしまさま　あなた
様が御そんじでハ
ございませんか
このようにゆらせ
て下さりますとハ
間事間事きこへません
地しんもせけん一とう
で　ぜひも御ざいません
が　あなたニわ
かなめいし
といふ大丈ぶ
な石がなんの
ためで御さいます
このようにゆりる
くらいなら　なぜ
要石でありますよ
そのようないし
ならいりませんから
ぶんたおして
しまうがいいト
ミなミな一どうに
かしまさまを

くどきけるこそ
どうりなり

神主
「これこれ　ミなミなのいふ所
しごくどうりにハあれ
ども　そのよふにはら立で
下されてハわれわれが
間事間事大ごまりニ
ぞんづる　これといふも
天さいのなす所とあきら
めて下さりませ　又そのようニ
大せつなるいしおこハされてハ
手前どもがしよくぶんが上る
ゆへに　どうかひらニ御めん下さり
ますト神主間事ニめいわくそうニ
わひにける

No.120「鹿島大明神の瓢箪鯰」

子朋（＝こども）
「おにいがかたきだ　にげるな　にげるな

なまづ子
「もうこないから
かんにん　かんにん

なまづのをくびよ（＝臆病）
「なに
かバやき
こいつわたまらぬ
にげろ　にげろ

なまづ
「せうたん（＝瓢箪）で
おさいられてハかなハぬ
かんにん　かんにん

国侍
「くやどもか人によた（＝与太）をしす
うぬびんた【※びんた＝頭、首のこと】
ぶちはな
すぞ

なまづ
「かんにん　かんにん
かしま
「まい年の
事ゆへ　いづもへ
旅立に一日にて
このしまつ　先だ
つても信州トいい
大坂トいい手まへ
までがこのしまつ
のミすきとハいわせ
ぬぞ　このハきつと
つつしめ　つつしめ

女郎
「ヲヤ
のめのめとよく
ぶらつきにきや
さんした
我もいれぶち
くらしておやりよ
ふざけたやろうた

名ぶつ　なまづかバやき
大入叶　あたりや

No.121「かけ合あふむ石」

●白屋権八　【※●は白屋権八のセリフ
ばんじやくいん　■は盤石院鹿嶋や長兵衛のセリフ】
■鹿嶋や長兵衛

■とわれてなんのなに
神と　なのるやうな神号
てもござりますぬ　しかし社ハ東路に　気も
浮たつた銚子の鼻　江戸でうハさの
常陸帯　磐石院の長兵衛といふ
唯一の社さ　●スリや神国にて隠れなき　鯰
おさへた磐石の　■アアもしもし　そふいわれ
ちやアめんほくねへが　わしハ此間いつものとふり　仲間の手合の
寄合に　出雲へ立たもきのふけふ（＝昨日今日）るすに震た大鯰　ほんの事だ
が是迄ハ
お江戸に地震のないやうにと　ねた間も石ハゆるめませぬ　神前
ならハどのやうにも手強ひ神託もいいましやうが　ほんの途中で
すねッがぎり　江戸の鼻迄帰たおかげにやァ　気がつよい
よハひ鯰ハ除てとふし　強ひやつ
ならむかふづら　此以後に大鯰が
出て　左右の髭をふつてきても
びくともさせる事じやァごぜへ
ませぬ　およばずなから要のいし
づへ　家根の瓦ハおちてわれ

破(やぶ)れた家(いへ)ハまだ
野宿(のじゆく)　よしハら
五町を火事(くハじ)でやけ
江戸の鯰(なまづ)と口ぐちに
なまづのなかの鯰(なまづ)
一疋(いつひき)　いつでもまいりに
ござりませ　神前浄(しんぜんきよめ)て
まつて居(い)ます

地震の
大出火

鹿嶋山
要石

十月二日の取組
大ゆれ　大ゆれ
大はんぜう（＝繁盛）　大はんぜう
大はんぜう　大はんぜう

かミなり
「こりやじしんにや
　かなうまい

見物
「ヤイ
ししんめ
引分てしまへ
引分てしまへ

〃
「出火（かじ）しつこめ（＝引っ込め）
いいかげんにしろ
いいかげんにしろ

金持おやぢ
「たがいに
つかれた
ようす
早々
引分
にせねバ
おれがこまる
職人
「じしんまけるな
かじもまけるな
かしま「地しんの子
大火事の角力
この後　行司かしまが
預かり申成下